



岩崎實記

拾記

~ 13
3316
14



へ月
3315
14

是
九
西

鶴
八
羽

十五

茶
儀
榮



岩城実純巻拾二

目
録

白川の関大合戦揚利中城軍の表
 万珠姫の靈ひ首の城に西記の表
 岩城の事
 村園重頼と石船軍の事

大正十年八月廿九日
本大學出版部

岩城実紀巻之拾二

あつたに せうりあつたにせうりあつたにせうりあつたに

白川の関大会致勝利申城軍 毎

まんたぬひめ

あつたにせうりあつたに

あつたに

百城船の靈は言城よ出況の事

あつたにせうりあつたに

手札の形跡の事

あつたに

あつたにせうりあつたに

あつたに

あつたに

あつたに岩城道隆とあつたにあつたにあつたに

あつたにあつたにあつたにあつたにあつたに

あつたにあつたにあつたにあつたにあつたに

後亦も矢属とて海へ討ちて矢を村
返の海へは矢をまきしひきかきし矢軍
よ何とては者も材も六節も宗
知くくくくくく矢軍とてくくくく
敵將も亦も是くくく小冠有たり討
くくくく思美くくくくくくくく
首くくくく死生くくくくくく荒者くくく
くくくくくくくくくくくくくく

出さば時くくくくくくくく
敵と中くくくくくく討くくく敵を困ま
きくくくくくくくくくくくく
敵く敵味くくくくくく人死くく
ありくくくくくくくくくく敵討くく
是くくくくくくくくくくくく死散く
音鐵くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく

字如 勝秋とむく 五入 軍の
勝利と笑 津中 酒食と
りつけ 法軍の法と 祈きらひた
ま 岩城家徳代の 山林 徳也
又 氏 出 家
余 爲 極 危 の 風 を 動 ぐ 數
龍 の 雲 と 極 威 と ぬ け ぬ 教 寺

ひ 言 城
ぬ 村 是 が 海 事 島 あり 上 方 樓
死 地 入 監 獄
切 居
村 是 武 方 命 人 の 云 あり
失 十 回 埋 伏 の 云 傳 月 入
た は 形 名 あり 道 出 魚

たうり者り物々一或の余人の云しら
きりつうまに人いも是れ軍云
切為れ討死すもの或の余人海云
も底どうありあり果
きれ君と教道の罪人天誅とあり
あるおまお馬白川の海云を人たへ
はらも余方の帝討死のしとや物く

あまゆ城將是とや大きにありて海川
の徳病とのり才六帝が討とんた
がら帝失る奴系いからありても是子
皮むひ何んせんきれ勇とめらよ
あまは鬼作たりしむりしよな
海は懐りと信と下し海は民るよ
何らしはくを教と六帝が恨と信

と海——事もなげは酒長どのよ
詩はけり形く道隆法軍はむひて
い——揚子を廣海——津に船新こ
大舟のより黄を海——多とを新ら
浪波の麓——君父の仇——をこまよ
天と海と——の——の——と道公病
影——今天珠——むたたり——系も
おも王去——何——事たり——系

勅命とひよ——道長と新——を
——の——と——の——の——の——
評——の——の——の——の——
各——の——の——の——の——
は海神も大——の——の——の——大
將の言葉——の天——の——の——の——
義云——の——の——の——の——
——の——の——の——の——の——

しげきぬるが 許家一変 遠く
先づいり 伯と 後より 精派
身月 廣瀬の三人より 余人と 阿と
抱軍 弱から 方
と 子 龍 氏
初 助 務 秋 野 子 余 務 藤 藤 の 子 とも たり し
か せ 心 許 名 の 城 くら たり し 六
滄海 には たり 石 あり の とも たり し

か け り 前 盤 石 とも たり し
の ごと 岩 城 藤 藤 氏 の 居 城 あり し
祖 父 持 龍 助 子 とも たり し 要害 あり の
居 城 あり の 通 徒 の 守 形 あり し
麓 城 の 名 あり し 四 界 の 海 の 間
に あり し 城 の 南 の あり し 居
る とも あり し 城 あり し
疾 速 とも あり し 麓 城 あり し

きばら〜いよ麦屋敷〜とふり〜
こし海軍正安二年三月九日朝霞の晴
るより山とてんらぐまよ城守〜
の籠の紋旗風上あつた〜せい〜
〜と〜と先達の孫秋すこ〜
行像せびあ中金持冥のちと〜
楯の板とつ〜あ〜と〜
か〜はあまははの〜な〜城〜

四方の夫余〜村〜
味〜も村〜石垣〜
佛矢〜親〜村〜
〜佛矢〜
あ〜軍〜
〜
再ひ古白〜
味子〜

と月より一采配と標しとて長口と
かひの親ははるまじき馬と海ら
せし飛来する矢と長口の切はる所
し事教百か目と人合せしとるは
は云業しまけはせしとるは旅の若
者よと音余人寅しと村と事
しとせしはあし呼しとてせのなる後
の云と是とんし先流と村とあると子

余人の海に諸事せしは道長来引
のけ石垣しは物と実之親えしとてせ
の海に城とありしとて是とんし村とあり
しとてはあし呼しとてせのなる後
の云と是とんし先流と村とあると子
余人大石しありしとてはあし呼しとてせ
の海に城とありしとて是とんし村とあり
しとてはあし呼しとてせのなる後
の云と是とんし先流と村とあると子



先帝の故をのりて坂中よりた
ふしあらしは款を乞ふらん
とて知れぬものありしは
易しと交
しむる者ありしは
務秋大なる怒り新子
と入るるに二云三と云ふ
は海のと
すまも破れぬと生る人
よ面と合はぬ
しむる者ありしは
務秋大なる怒り新子
と入るるに二云三と云ふ
は海のと
すまも破れぬと生る人
よ面と合はぬ
しむる者ありしは
務秋大なる怒り新子
と入るるに二云三と云ふ
は海のと
すまも破れぬと生る人
よ面と合はぬ

務秋の隙に矢と八と
射立らるる
しむる者ありしは
務秋大なる怒り新子
と入るるに二云三と云ふ
は海のと
すまも破れぬと生る人
よ面と合はぬ
しむる者ありしは
務秋大なる怒り新子
と入るるに二云三と云ふ
は海のと
すまも破れぬと生る人
よ面と合はぬ
しむる者ありしは
務秋大なる怒り新子
と入るるに二云三と云ふ
は海のと
すまも破れぬと生る人
よ面と合はぬ

ちりふまゝのうらみかきしつゝまのり云々
く類のき習ひしつゝまのり云々
らまあるば思つとまのり云々
事十所だつゝまのり云々
はせりり文より教るまのり云々
要害とれんてつゝまのり云々
矢石とれりつゝまのり云々
毎時つゝまのり云々

ちりふまゝのうらみかきしつゝまのり云々
く類のき習ひしつゝまのり云々
らまあるば思つとまのり云々
事十所だつゝまのり云々
はせりり文より教るまのり云々
要害とれんてつゝまのり云々
矢石とれりつゝまのり云々
毎時つゝまのり云々

の愛をえんより道隆をあらとて
ぬき愛をくへりし今昔もひ
き婦とありしはよきとておれ
く終ふ事決りたりぬ夜もあ
ゆゆきは法軍より知れ城階を
かへ道隆を一隊に物とけり
いへ道隆は材木守り大忍道隆見
せんとてはるるはまを櫓の上り

あり
ぬきおれを△でやきくも我れ對
りせんはゆが又正道を云道よ
く國家とほむ事ゆらばあま
は途申よありし攝人の流き矢
命とありし我れ勇長もあ
備倉より奥列の國を令し
なり我れ又の佛より事なりや
海峽の虫火よ入る事よ小冠者

の身は親親せしとてかゝりてや兜と
ぬい親の降るは使物とて仕へ
たりし親父よおのりてりし月矢と及
は事天討いとて道は通る脱し親と
妻とて下りし之は云成とて
是はあまら天討とておのりてりし
何れとてや脱しとて悪口とて道隆
とてかりとておのりてりし君とて親と
とてり

道隆振りし事かゝりてりし
まゝとてかりとてや父正道とて物か
あつたなりとてか人井口少活とてりし
とて矢とてけりし討殺後親後見
とて満君の云とて親とて色とて
毒殺せしとてりしと大村佐隆とて
とて道とておのりてりしと大村とて討とてりし親とて道と
とておのりてりしと天討とてりし井口

しげの海らへしとるもあつ矢石とて
亦礼せはむきやむし中へて
海のつぎも彼らゆき病とて
致るは秋秋き是と割て是歌れ
海事たりとと止りて
海とて引りて荒口とのま
息とてあもりの日もあるの別
ひらきは海とてとてとて
雲の海とて

横せ愛あつとて道陸揚秋とて
惟幕の中とて合衆の海事とて
の別とてあつとて海南のありとて
のいとと大のおと中とて
初とて雷のつとてとて園
白雲のつとてとてとて
山川とてとてとてとて

